

「壺割」の害

～親は自分の産んだ子供を最後まで守れ！～



「壺割」の害(3)

一中見えぬ「駆け込み寺」

前号では、会社の問題においても家庭の問題においても、「壺割(つぼわり)」方式の解決策は全く効果がないこと、それどころか悪しき状態を延命させるだけであることを述べた。逆に、その人のすべてを受け入れる暖かい心で接すると、人は安心して自ら壺を捨ててそこから出てくることを示した。

自らの意志で出てくる—それこそが自律なのだ。人に生きる意欲と活力を与えるのは、人の愛情エネルギーだけだ。「北風」ではなく「太陽」でなければ、人は自らの殻を脱ぎ捨ててはくれないのである。

◇◇◇◇◇

私が会社でも家庭でもやったことは、次の2つである。

- (1) うなだれている個人へのエンパワーメント(カブチ)
- (2) 個人を取り巻く環境(会社風土、家庭風土)を変えること

(1)で大切なことは気持ちを受け止めることである。気持ちを理解してもらえただけで人は勇気が湧く。

さらに自律までを目指すなら、自分の棚卸しをしてもらう。と言っても難しいことはない。自分の小さい頃を思い出し、自分と親との会話や出来事などのエピソード、そしてその時の気持ちを思いつままにどンドン書いてもらうのだ。書いている内に大きな気づきを得ることができるだろう。さらに、私が気づいたことをフィードバックすることによって自分がぐんぐん立体的になっていくだろう。

こうして、自分の過去に光を当てて新たに紡ぎ直しを終えたとき、人は自分を取り戻し、

自律の力がむくむくと湧いてくる。

このように、自分をより深く理解するためには「他者」が必要である。だから人間は一人では生きられないのだ。しかし、他者は自らの情や煩惱を乗せてくる。特に身内は我欲を乗せてくる。それを排除するだけで、もの凄いいエネルギーを使うことになる。そのため、純粋に鏡になってくれる他者が必要になってくるわけだ。その役割をするのが我々カウンセラーである。

◇◇◇◇◇

そして、真に大事なことは(2)だ。個人を変えても、風土がそのままであれば違う誰かがまた犠牲になるだけのことだからだ。

会社は組織風土を変えないままに社員に責任を押しつけ、親は自らの生き方を変えないままに子を問題視し、場合によっては切り捨てる。「姥捨て山」ならぬ現代の「子捨て山」となったアイメンタルスクールは、切り捨てられた子供たちの強制収容所だった。中では、『特別なカリキュラムなどなく、漫画を読んだり、トランプをしたりして過ごしていた』『中見えぬ「駆け込み寺」』5/22朝日新聞)だけである。

子供たちの気持ちを受け止めることも、自律に向かうための自分の棚卸しもやっではない。その上、拉致するように収容することによって、人間信頼の根幹をなす親への信頼を崩壊させた。壺を割って入って無理矢理そこから引きずり出し、結局別の壺に押し込んだだけである。罪は重いと云わざるを得ない。

◇◇◇◇◇

「壺割」の害(4)

一事件は現場で起きている

『中見えぬ「駆け込み寺」』(5/22朝日新聞)の記事に母親のコメントが載っていた。

『保健所についても病院に行ってもだめでした。

10年がかりでここを探したのに…』

『精神保健福祉センターもあるが、一般的にはあまり知られていない。結局、民間施設に足を運ぶ』

と書かれていた。約160万人の引きこもりのうち、『30歳以上の引きこもりが半数を占め、父親は平均61歳。4割近くが10年以上』(by「全国引きこもりKHJ親の会」という事態は深刻である。にもかかわらず、『どこにも相談したことがない』という親が昨年でも3割弱)もいたということは、相談機関を知らないこと、および身内の恥として相談しないまま放置している親も多いのではないかとと思われる。

会社に相談する相手はいない。家は孤立無縁のアパートやマンションで、地域にも知られたくない。困り果てている親にとって、自分たちの住んでいる地域から遠く離れた所で子を預かってくれる施設は救いの神に見えるだろう。しかし、前項『「壺割」の害(3)』で書いたように、そこでなされていることは、矜持の剥奪と相互不信のダメージを与える行為であった。

『被害者は多いはずですが、声が上がらないのは、子供を預けている間は何もいえないから。親としての負い目もある。塾を出ると、もうかわりたくないと思うから黙っています』(『週刊朝日』5/26号)—実際に親子共々深い傷を負っているのである。

施設のスタッフは、自分の子供が引きこもりになった時に、我が子をその施設に入れるだろうか。

私が直接ご家庭に訪問して家族カウンセリングを行っているのは、問題視されている個人を治すためではない。ご家族全員を共通の土俵に乗せるためである。それぞれの

翻訳・通訳

3ヶ国語(日・英・中)
証書類翻訳も承ります。



Pavilion Translation Service (パビリオン翻訳部)

Tel: (847)-640-9676

E-mail: info@pavilion-america.com

パビリオン [グループ定期購読]

お友達・ご近所様、企業様へも、一緒にまとめてお届け！みんなでパビリオンを読もう！

●下記、必要事項を別紙にご記入(またはE-mail)、チェック添付の上、下記宛先まで送り下さい。チェック受取り後、弊社よりE-mail(またはTEL)にてご連絡させていただきます。
※E-mail(またはTEL)ご連絡先を必ずお知らせ下さい！

■必要事項■

<選択> 20冊/12ヶ月購読希望 (\$350) 40冊/12ヶ月購読希望 (\$600)

<必須> Name(Company Name): / Address: / Zip: / TEL: / E-mail:

※お届け先は一ヶ所のみ、チェックお支払いもお一人様(代表者)のみでお断り致します。

- 月一回発行(毎月月末) ※米国内のみの発送 ※小部数または40人以上の
- 毎号20冊(計240冊) = \$350(お一人・年間\$17.50) 大部数でも対応可能です。
- 毎号40冊(計480冊) = \$600(お一人・年間\$15) 別途、お問合わせください。

To: Pavilion Graphics Inc. E-mail: pavilion@johoya-usa.com
1699 Wall St. Suite 210, Mt. Prospect, IL 60056

心理的状況を共有した時に、家族は同じ立ち位置に並ぶことができる。そこから家族力回復への歩みが始まる。家族が足並みをそろえて歩き出した時、問題視されていた個人の症状はなくなっていく。

前出のコメントのように親が負い目を感じる対策は解決策ではない。親も子も、ともに生き直すことが本当の解決策だ。なぜなら、親が(特に母親が)生き活きと自律的に生き始めることが、子どもにとって最高の幸せだからだ。その時、子どももまた大きな自信を持って自分の人生の第一歩を踏み出すことができるのである。そのため私は、親を気づきに導き、親にエンパワーする(ただし、親自身が壊れている場合は別だが)。

これからのカウンセラーは、カウンセリングルームの中で待っているのはダメだ。救いを求める家族の中へ飛び込んでいく必要がある。「踊る大捜査線」ではないが、「事件は現場で起きている」。現場で得られる情報は、カウンセリングルームで得られる情報を遙かに凌駕するのだ。それができるようになるためにも、すべてのカウンセラーに家族療法を学んでほしいと思う。

◇◇◇◇◇ 「壺割」の害(5)

一國がなすべきこと

引きこもって一番つらいのは一体誰だろうか？引きこもっている本人である。誰だって、外に出て働き、普通に暮らしたいのだ。

それができるとのなんと幸せなことか。自分の部屋にしか自分の世界がないこと、なんと耐え難くつらいことか。子供は親の代わりに自分の身をもって格闘している。親が自ら格闘すべきことを代行してやってくれて

いるのだ。その格闘を見るのがつらいからと、子供を外へ隔離する…。子供を外施設に手放したとき、親は自分が成長するチャンスを失うのである。

しかし、しがらみに絡め取られ、方法論を持たないために途方に暮れるのもわかる。その時は、躊躇せずに助けを呼ばばよい。困った時に助け合うのが社会だ。恥ずかしがる必要はない。それが当たり前のことなのだ。

ところが、誰かが「自己責任」などという間違った価値観を蔓延させたおかげで、日本という国は、「助け合い」という社会の根源的機能を失いつつある。そして、孤立した家の中では虐待、DV、モラルハラスメントなど支配と服従の病理が急増している。

今や陸の孤島と化した家族への心理的レスキュー隊が必要な時代になってしまった。引きこもりの社会復帰を支援しているNPO法人ニュースタート事務局(<http://www.new-start-jp.org/>)。そこが行っている「レンタルお姉さん」のような地道な訪問活動が求められている。しかし、『国の補助金がないだけに限界』

『今のままでは間に合わない。国の支援を考えるべきだ』(全国引きこもりKHJ親の会 代表 奥山雅久 5/22朝日)。

私のように家族を支援できる技能を持つ「家族相談士」は、まだ日本全国にたったの750名しかいない。しかも、実際にご家族の下へ行かれる人ほとんどいないだろう。

人を隔離するだけのハコは、もういらぬ。ハコモ行政はとうに破綻しているはずだ。

必要なのは、援助できる人の育成と、援助を受けやすい法整備である。心の健康の問題のために「健康保険」を早急に活用できるようにすべきだと思う。(中尾英司)

未明に物音と悲鳴 入所後わずか5日

不登校や引きこもりなどの人が50人以上暮らす施設で何があったのか。名古屋市NPO法人「アイメンタルスクール」の寮に入っていた男性(26)が手足に多くの傷を負って死亡した事件で、愛知県警は20日、本格的な捜査に乗り出した。集団生活やアルバイトを通じて自立心を養い、社会復帰を目指す。男性が入所5日目で帰らぬ人となったのは、そんな施設だったという。

18日午前8時、目を覚ました男性はぐったりとした様子だった。職員が体温を測ったが、低かったという。杉浦昌子代表理事と職員が施設の車で病院に運んだが、午前9時10分に心肺停止が確認された。近くに住む女性はこの日の未明にドーン、ドーンと2回、大きな音を聞いていた。何かをたてきけるようだったという。女性は「物音の他にギャーという叫び声も聞こえた。いつも夜中には声や物音がしていたが、この日はいつもと様子が変わった」と話す。

県警の調べでは、夜は2人の職員が付き添うが、この夜も暴れたため、職員らが抑えたという。県警の司法解剖の結果、外傷性ショック死とみられる。両腕や両足などに多数のない出血やすり傷があった。職員の話では、男性は今月14日、母親の依頼で東京世田谷区の自宅から寮へ移った。男性は引きこもりで、「自分では外に出ることができないから」だという。寮では、3階建て施設の1階にある「大部屋」に入った。20畳ほどの畳敷きの部屋で、ほかの9人の入寮者と同居した。この寮には、10代から40代にかけての男女50～60人が入っているという。男性は入寮日から激しく暴れ、触れられることを極度に嫌がった。もがくように手足を振り、時には職員に殴りかかった。こうした状況は毎日続いたという。

職員の一人は「入寮者に職員が暴力をふるうことはない。拘束具なども使っていない。暴れても話をして落ち着いてもらった」とする。しかし、「当日の詳しいことは代表理事にしかわからないが、連絡がとれない」とも話す。杉浦代表理事は20日も、報道陣の前に姿を現さなかった。

【参考・転載:『タカマサのきまぐれ時評』:26歳死亡、引きこもり更正NPO施設検証<朝日新聞(名古屋本社版朝刊)の社会面記事より転載>

<著者紹介>

中尾英司(家族相談士・シニア産業カウンセラー)

■メール:sodan@jiritusien.com

■プロフィール:

電話&メール相談、及び直接ご家庭に伺って家族カウンセリングを行い、虐待、ADHD、窃盗癖、ギャンブル依存、モラハラ、DV、離婚、会社のセクハラ・パワハラの問題などを手がけている。組織改革を成功させた後、会社の風土改革から家庭の風土改革に軸足を移す。シニア産業カウンセラーの育成、講演依頼COMの講師、テレビ東京「朝は楽しく！」の「我が家の事件簿」のコーナーでコメンテータ出演。

■著作:『あきらめの壁をぶち破った人々』(日本経済新聞社)、

『あなたの子どもを加害者にしないために』(生活情報センター)。

■サイト:「中尾相談室」、「組織改革ご支援.COM」。

■ブログ:「あなたの子どもを加害者にしないために」



アメリカで家を買う・売る・投資する!

初めてのマイホーム・マイコンド、雇用ビザでの不動産購入・投資その他あらゆる不動産売買に関する基礎知識・ご相談、情報提供をさせて頂いております。信頼あるリマックスで、経験と知識豊富な、私達エージェントに是非お任せください。(ジェリー)



RE/MAX MARKET

不動産エージェント/ Jerry Grodesky

TEL: (847)-640-9676 (日本語アシスト)

物件リスト: www.searchhomemarket.com